

図書館通信 —69—

1984. 10

インドネシア大学日本学科の学生たち

田村 貞雄

ジャカルタの朝は早い。朝5時からバスが動きだし6～7時台がラッシュのピークである。学校は午前7時から始まり、役所・会社は8時から仕事開始である。銀行も郵便局も午前8時きっかりにシャッターがあく。

大学も第1時限は7時半はじまりである。これには参った。インドネシア共和国は東西5,000 km以上あり、三つの標準時を使っている。ジャワ島のジャカルタは西部標準時を使っているが、これは西端のスマトラ島を基準にしているから、奇妙なことが起こる。たとえばジャカルタより西のシンガポールの方が、1時間早い標準時を使っているのだ。

日の出とともに仕事ははじまる、というのは極端な表現だが、熱帯ではこの方がかえっていいのだ。朝のうち涼しい時に一仕事しようというわけである。

私が居たのは国立インドネシア大学文学部、その東アジア学科日本文学研究プログラム、略して日本学科である。肩書の客員教授は少々面映ゆいが、要するに3年生以上の学生に日本史を教えるために派遣されたのである。

何語で教えるか、というもちろん日本語である。驚いたことに学生たちは大学に入ってはじめて日本語を教わるのに、3年生ともなると日常会話が何とかできるようになり、文学と歴史の日本人教師の授業を聴講できるのだ。本学の英米以外の外国文学外国史の学生諸君はどうだろうか。

このことについては別のところでくわしく書いた(静岡新聞8月22日付夕刊)ので、ここでは学生の勉強ぶりと図書館について述べよう。

大学の始業が7時半だと書いたが、授業は1コマ90分で、昼までに3コマ、午後1コマある。休憩は15分づつである。つまり次のようになる。

第1時限 7:30～9:00

第2時限 9:15～10:45

第3時限 11:00～12:30

第4時限 13:00～14:30

ここで問題なのは昼休みがたった30分ということである。私の場合、火曜第2時限、木曜第3時限、第4時限の3コマだったが、昼休みの短いには、早食いの私でも困った。

大学は午後1コマで終わるが、これは昼間部のサルジャーナ・コースであって、午後だけのディプロマ・コースの授業が、13:00から3コマほどある。これは3年制の短期大学で、カリキュラムはほとんど同じで卒業論文が課せられていない。ここにも日本学科があるが、学生はなかなか優秀で、昨年の全国日本語弁論大会では、ディプロマの3年生が、サルジャーナの4年生より上位に入賞している。

さて図書館であるが、インドネシア大学では中央図書館制をとっておらず、学科別図書館制をとっている。大学はサレンバ地区とラワマングン地区に分かれるが、ラワマングン地区には法、社会、心理、文の4学部があり、それぞれ図書館もっている。文学部は学部図書館とは別に各学科図書室があり、日本学科にももちろん図書室がある。

日本学科図書室はすべて開架で数千冊の日本語の図書があり、国史大系、群書類従、日本古典文学大系、明治文化全集、明治文学全集、現代史資料、各種百科辞典の外、何人かの作家の全集がある。このコレクションは東南アジア最大のものという。

も く じ

資料案内	2
〈私のすすめたい本〉	
『朝鮮日々記・高麗日記』	4
『間脳思考』	5
昭和58年度図書館統計	6

学生たちはこれらの本に囲まれながら勉強しているのであるが、問題は二つある。

一つはこれらの全集・叢書は、学部学生の力ではほとんど太刀打ちできない、という点である。近年某社の寄付で岩波新書が500冊架蔵されたが、その1冊を半年ぐらいかかって読み、卒業論文を書くのがやっとで、しかも自力ではなかなか読めない。卒論指導は日本人教師によりマン・ツー・マン方式で行われていて、私は常時5人、多いときは7人、毎週10コマぐらい受けもっていた。学生がまず声を出して読む。ついで私が読みあげ、一つ一つのことばをていねいに指導する。いろいろな辞典を提示し、地名には地図を、人物には肖像画や写真を示して指導する。汗びっしょりの熱演である。この経験からいうと、もっとたくさんのお新書やB6判の一般書がほしいし、説明文のやさしい国語辞典、漢和辞典がほしい。

もう一つは開館時間の問題である。学科別図書室だから専任の事務職員はおらず、教師の一人が

開閉室をする。その人の都合で時間が決まってしまうので、困ることが多かった。

そこで国際交流基金(私の派遣団体)の日本文化センターの図書室を利用することが多く、その片隅や別室を使って論文指導をした。ここには中公新書・講談社新書があつて助かったが、半分は英語の本であり、また神道、庭園、陶磁器、刀剣などの解説書が多く、日本文化についてかたよったイメージ(欧米人好み)を与えているようだ。昼休みは完全に閉館して閲覧者を追い出すこと、平日は4時、土曜は12時に閉館し、日曜は開かないなど、不評が多い。朝も9時開館とインドネシアとしては遅いのだ。

しかし日本学科の学生(1学年定員25名)の大半は女子学生であり、どういふわけかこの国では天が二物を与えており、片言の日本語もなかなか可愛らしく、楽しい1年間を過ごすことができた。

(教養部・歴史学)

〈資料案内〉

東海地区大学図書館協議会共同利用図書について

(昭和57年度)

東海地区大学図書館協議会では、加盟館が年度内に新しく購入した資料について情報交換を行い、相互利用できるよう、昭和48年度分より、協議会誌上に加盟館の新着情報を掲載しています。この対象となるのは、①共同利用の対象となるような図書または資料集、②新規購入外国雑誌のうち当該年創刊の雑誌となっていますが、ここでは、前号の大型コレクション案内に関連して、同協議会昭和57年度分新着情報より、①の共同利用の対象となる資料を紹介することにしました。

資料の内容及び閲覧、利用については参考調査係にお問合わせ下さい。

〈総記〉

Sachkatalog/Bibliothek des Instituts für Weltwirtschaft, Kiel. Boston, G. K. Hall, 1968. マイクロフィルム (名学院)

伊勢新聞 大正4—昭和26. マイクロフィルム (三重大)

中国学術名著 中華民国 世界書局 1981. 800冊 (中京大)

〈人文科学〉

Historical and statistical information respecting the history, condition, and prospects of

the Indian tribes of the United States/Henry Rowe Schoolcraft. New York, Paladin Press, 1969. "Reprint of the serials published in 1851—1857, by Lippincott, Grambo, Philadelphia" (静大)

Mercure de France. Série moderne. Vol. 1—354. Paris, Mercure de France, 1890—1965. (名城大)

Nassauische Annalen/Verein für Nassauische Altertumskunde und Geschichtsforschung. Bd. 41—89. Wiesbaden, 1910—1978. (静大)

Review of English studies ; a quarterly journal of English literature and the English language. Vol. 1—25, new ser. 1—27. Oxford, Clarendon Press, 1925—1976. (静大)

Shakespeare Jahrbuch. Bd. 1—116. Weimar, H. Böhlhaus, 1865—1980. (名大)

静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成：第1編 古物語 1—52, 収録書目録：第1編 古物語 東京雄松堂 1982. マイクロフィルム (静大)

〈社会科学〉

- An der Wende des Zeitalters ; individualistische oder sozialistische Kultur?/Viktor Engelhardt. Berlin, Arbeiterjugend, 1925.
(名大)
- Annual report on exchange restriction. 1 (1951) —29 (1980). Washington, I. M. F. Lack : 25 (中京大)
- Archives of the Trades Union Congress. Ser. 1, General Council minutes. 1921—1946. Hassocks, Harvester Press, 1975. マイクロフィッシュ (名大)
- Archives of the Trades Union Congress. Ser. 2, Pamphlets and leaflets. Hassocks, Harvester Press, 1977—1980. マイクロフィッシュ (名大)
- Archives of the Trades Union Congress. Ser. 3, Periodicals and serials. Brington, Harvester Press, 1981. マイクロフィルム (名大)
- Deutsches Strafrecht. N. F., Bd. 1—11. Frankfurt a. M., Keip, 1971. (名大)
- The Economist. 1870—1914. London, U. M. I. マイクロフィルム (中京大)
- Entscheidungen des Reichsgerichts in Strafsachen. Bd. 1—77 ; 1880—1944, Generalregister Bd. 1—75 ; 1903—1944. Leipzig, Veit. (静大)
- Finanz-Archiv ; Zeitschrift für das Gesamte Finanzwesen. Jg. 1, Bd. 1—Jg.48, Bd. 2. Stuttgart, Cotta, 1884—1931. (静大)
- Goldammer's Archiv für Strafrecht. Jg. 1953—1976. Tokyo, Yushodo, 1977—1981. Reprint of the serials, Hamburg. (静大)
- International law reports. London, Longmans, 1919—1982. (中京大)
- Irish University Press area studies series ; British parliamentary papers. China. Vol. 1—42. Shannon, IUP, c 1971. (名市大)
- Irish University Press area studies series ; British parliamentary papers. Japan. Vol. 1—10. Shannon, IUP, c 1971. (名市大)
- Irish University Press series of British parliamentary papers. Industrial revolution and urban areas. Shannon, IUP, 1968- (岐阜経済大)
- Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. Bd 1—100. Jena, Mauke, 1863—1913. Lack : Bd. 7, 41 (静大)
- Journal of the Royal Statistical Society. Vol. 1—54. London, Dawson, 1839—1891. (静大)
- Koloniaal verslag van 1891—1926. Algemeene Landsdrukerij. (名市大)
- National Resources Committee. Vol. 1—19. World Scholar, 1982. Originally pub. by U. S. G. P. O. (名市大)
- Reichs-Gesetzblatt. 1867—1945, Haupt-Sachregister. Berlin, Zu haben im Kaiserlichen Postzeitungsamte, 1867—1944. (名大)
- La Semaine juridique ; jurisclasseur périodique. Année 1927—1966. Paris, E. T. L. J. (名城大)
- West's California reporter. Vol. 1—181. St. Paul, West, 1960—1982. (名大)
- Zeitschrift für Handelswissenschaftliche Forschung. Jg. 1—33. Leipzig, Geloekner, 1906—1949. Lack : 24—27 (静大)
- 行政裁判所判決録 第1—57巻 第14—58輯 東京 東京法学院, 帝国地方行政学会, 法曹会 明治23~昭和22. (名城大)
- 厚生の指標 東京 厚生統計協会 昭和29—55. (中京大)
- 政友 第144—478号(大正元年—昭和15年) 文献資料刊行会編 東京 柏書房 昭和55—56.
- 立憲政友会刊の復刻版 (静大)
- 竹斎 江戸大伝馬町 鱗形屋 延宝5—6年. 3冊 (中京大)
- 統計集誌 第1—225号(明治13—32年) 東京 統計協会編 復刻版 東京 雄松堂 1982. (岐阜経済大)
- 東洋経済新報 第1—782号(明治28—大正6) 東京 東洋経済新報社 (静大)

〈自然科学〉

- 医科学大辞典 ; Encyclopedia of medical sciences. 東京 講談社 1982—1983, 50冊 (名市大)

※資料名のリストは、『東海地区大学図書館協議会誌 28 (1983)』より転載いたしました。

〈私のすすめたい本・51〉

北島万次著

『朝鮮日々記・高麗日記』

小和田哲男

もう10年以上も前になるが、京都にある豊臣秀吉関係の遺跡をまとめて歩いたことがあった。大坂の陣のきっかけとなった方広寺の鐘をみて、その隣の豊国神社をみて、京阪電鉄の七条駅にむけて歩いていたとき、思いもかけないところで一つの「古墳」にぶつかった。案内板によれば、それは「古墳」ではなく「耳塚」というもので、しかも、文禄・慶長の役のときに日本の武将たちが朝鮮でとった首のかわりに耳や鼻を切りとって日本に送り、それを埋めたものであるというようなことが書かれてあった。しかし、そのときはただ説明板を読んで、「へえー」と思った程度だった。

ところがその後、神田の古本屋街で琴兼洞氏の『耳塚』（二月社）という本を入手し、文禄・慶長の役のときの秀吉軍の朝鮮半島における耳切り・鼻切りのすさまじいばかりの実態に目を向けさせられたのである。以前みた耳塚に、10万人以上の朝鮮人の耳や鼻が埋められていること、しかも、その耳や鼻は朝鮮軍の兵士だけではなく、一般民衆も含まれていたことや、生まれたばかりの赤ん坊のものまで含まれていたという事実を知った。つまり、慶長の役のときには、朝鮮半島に渡った日本軍は、いかにたくさんの耳や鼻を日本に送るか、送った耳や鼻の数の多さでいかに秀吉をよろこばせるかに腐心していたかという事実をつきつけられたのである。

今度、「日記・記録による日本歴史叢書」の1冊として北島万次氏の『朝鮮日々記・高麗日記』（そしえて）が刊行された。この本は副題に「秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発」とあるように、『耳塚』で記されたことがらを、さらに実際の史料に即し、しかも詳細に論じたものである。

本書の表題の一つになっている「朝鮮日々記」は、豊後臼杵にある安養寺という浄土真宗の寺の住職で、慶長の役に従軍した慶念という僧が書いたものであった。彼は慶長2年(1597)6月24日に豊後国の佐賀関を出発し、朝鮮に渡り、南原の戦い、さらに蔚山の籠城などに医僧として従軍し、翌年2月2日に豊後臼杵にもどっているが、その間、彼の地で見聞したことを書き留めている。たとえば慶長2年8月、慶念は巨濟島を経て全羅道に入ったが、その6日の日記には、「野も山も、城ハ申におよはず皆々やきたて、人をうちきり、く

さり竹の筒にてくひをしハリ、おやハ子をなけき、子ハ親をたつね、あわれ成る躰、はしめてミ侍る也。」と記している。

そのころ、朝鮮出兵の武将たちから秀吉のもとへ塩漬け、あるいは酢漬けにした耳や鼻が送り届けられ、その請取状が軍目付から出され、いわゆる「鼻請取状」が今日かなり残存するのである。北島氏は「鍋島家文書」・「藤堂家文書」・「吉川家文書」などを博捜し、耳切り・鼻切りの実像を掘りおこしている。「清正高麗陣覚書」には、「日本人売人役ニ朝鮮人の鼻三ツ宛、当てられ、其鼻、高麗ニて横目衆実験仕らる」とあり、1人3つの鼻を取ることが義務づけられていたことを知る。仮にその通りに実行されていけば、実に45万人もの鼻がそがれた計算になる。

なお、北島氏は、文禄・慶長の役のもう1つの大きな爪跡として、朝鮮人技術者の強制連行を指摘する。萩焼・唐津焼・有田焼・薩摩焼などの陶磁器が朝鮮渡来の陶工によってはじめられたことは、今日、常識的な事実であるが、それら陶工が、この文禄・慶長の役の秀吉軍の侵略のとき、捕虜として強制連行させられたという事実についてはあまり知られていないようである。本書において北島氏は、薩摩国苗代川の陶工を具体的にとりあげ、彼らが、慶長2年8月の南原城の戦いの際に捕えられ、工房の陶工をまるごと連行したものであったことを明らかにした。もともと、野口赫宙氏の『陶と剣一秀吉の朝鮮出兵と陶工大渡来一』（講談社）では捕虜強制連行説に疑問をさしはさんでいるが、少なくとも苗代川の陶工をみる限り、強制連行であったことは疑う余地がないであろう。

教科書の近代で「侵略」が問題とされている今、前近代における「侵略」も再度とらえなおすことが必要と思われる。そのことは、豊臣政権の本質をさぐり出す上にも不可欠の作業になるであろう。
(教育学部・日本史)

(*印は本館所蔵を示す)

私のススメラレタ本（紹介）

『間脳思考—靈的バイオ・ホロニクス』の時代—』

阿含宗管長 桐山靖雄著 平河出版社

山下繁男

“きみは21世紀にむかって生き残れるか？”の檄に始まるこの書は、『21世紀(もしもそれ迄今の世界が存続するならば)は、極度に発達して驚ろくべき性能を持つに至ったエレクトロニクスと、優れた靈的感性を持つヒトによって形成される世界になる。優れた靈的感性の持主のみが最高度に発達したエレクトロニクスを駆使して、この世界を維持し発展させてゆくことになるだろう。それ以外はすべて底辺社会に呻吟するしかないことになる。

20世紀終末から21世紀にかけての世界の変貌には想像を絶するものがあり、昨日今日明日の続きは最早なく、突如これらの中に亀裂が走り断層を生じて人々の生活にその姿を一変させる。斯る時代に向かって生きねばならぬきみに“生き残れるか？”と問い、この極度に発達した世界を制御し統治できる高い靈的感性=靈的能力をもった人間(それは人間を超えた高い感性と知性と徳性を具えた存在=ホモ・エクセレンス)となるべく、速やかに準備を始めねばならぬ』と説く。それ故に、ここにシャカの成仏法によって限りなく優れた能力=靈的能力を身につける技術があり、これこそ21世紀に残れるヒトになれる技法であると教えている。

人類学者リンネは、人間を分類して知恵あるヒト=ホモ・サピエンスと学名をつけ、生理学者シャルル・リシェは愚かなヒト=ホモ・スツルツスと名付けた。これは賢い知恵ある面と、愚かで弱い面とを一つに混合し矛盾を内包する生物が、正にヒトであることを示しているが、現在の吾々の周囲には愚かな面=ホモ・スツルツスのみが妖怪の如く横行している。科学と技術はヒトの力を無限に拡大したが、同時にヒトの殺戮と搾取と憎悪と闘争をも無限に増大させ、この儘ではホモサピエンスは絶滅するだろうとさえ言われ、一瞬たりとも生命の危険を感じずして生きている人間はひとりもいない。しかし、是までは常に機械と技術=科学がその危機を乗り越えてきたが、今やその機械と技術が先頭に立って人間に打撃を加えている。特に1945年8月6日、この日以前は人間は「個としての死」を予感しながら生きてきたが、この日以後は人類が「種としての絶滅」を予感し

て生きていかねばならなくなった。技術の進歩は、核兵器を強力にし、且つ製造容易、大量貯蔵を可能にしている。故意にか偶然にしろ、これに火が燈もる可能性は増大し、遂には不可避ともなる可能性さえ予感させる。

この危機を作り出したのは人間の脳に欠陥があるからだともいう。自然は人類に三つの脳を授けたが、それらは構造が極めて異なるのにも拘らず共に機能し、互いに通じ合わねばならぬ構造になっている。三つの脳のうち最古のものは基本的に爬虫類の脳であり、二番目は下等哺乳類から受け継いだ脳である。そして三番目は後期哺乳類から発達した脳で、それが人類を異様に「人類的」にしてきたのである。爬虫類型の脳と古代哺乳類型の脳は共に所謂辺縁系を構成し、新皮質なる人類特有の「思考の帽子」に対して単純に「古い脳」とも言い人間の脳の中核にあって本能、激情、生物衝動を制御している。この古い脳構造は殆んど進化の影響を受けていないのに対し、ヒト科の新皮質は過去50万年に進化史上例を見ぬ爆発的速度で発達を遂げ、人間に論理的な力を与えはしたが、情緒専門の古い脳構造と密接に統合調整することなく覆いかぶさった為に、この古い構造をもつ中脳と新皮質を繋ぐ神経経路=(間脳部位)は連携不備な儘取り残されてしまい、それ故に間脳の発達が阻害され生々のいとなみに健全さを失なう結果を現生させることになってしまった。

斯る危機の叫ばれる現在、この歪みを早急に是正せんがためには、間脳開発訓練により、極度に発達した知能、感覚器官の増幅、環境の制御と創造・物質を超え物質を自由に統御する力、無限に発達した道徳意識等の高度の能力を具えたホモエクセレンスが必要であり、それ故に間脳開発が絶対不可欠の要件となる。21世紀に生き残る唯一の方法=間脳開発によりホモ・エクセレンスに到達することであり、それはシャカの説く靈的世界との共存を可能にする。そして、シャカの説く唯一の経典「阿含経」こそホモ・エクセレンスへの最短の道程を示す最良のテキストであると説いている。

勧進一読。

(理学部・物理学)

昭和 58 年度図書館統計

■利用統計

(1) 貸出・閲覧

本館 (学部別)

区 分	利用対象者数	閲覧(冊数)		貸 出 (冊数)			
		出 納	開 架	出 納	合 計		
学 部	人文教育	675	3,641	6,831	2,760	9,591	
	理 農	1,036	1,979	8,032	1,783	9,815	
		379	201	5,426	239	5,665	
		285	23	640	6	646	
	生 育	人文教育	747	303	3,476	345	3,821
		理 農	1,032	507	3,804	350	4,154
		409	72	3,161	88	3,249	
工		320	70	1,119	20	1,139	
	1,007	59	2,248	36	2,284		
院 生 等	237	236	1,547	582	2,129		
小 計	6,127	7,091	36,284	6,209	42,493		
教 職 員	教 官 (職 員)	437 (354)	—	328	4,872	5,200	
	研 究 室	—	—	—	7,011	7,011	
	小 計	791	—	328	11,883	12,211	
学 外 者	—	419	—	—	—		
合 計	6,918	7,510	36,612	18,092	54,704		

浜松分館 (層別貸出)

区 分	貸 出 冊 数
学 生	6,233
院 生 等	1,752
教 職 員	1,014
合 計	8,999

(2) 貸出・閲覧

本館 (学生・分類別) (冊数)

区 分	閲 覧	貸 出		
		出 納	開 架	出 納
0 総記	116	309	78	387
1 哲学	248	2,135	470	2,605
2 歴史	706	2,397	939	3,336
3 社会	1,058	9,092	1,724	10,816
4 自然	216	12,194	377	12,571
5 工学	56	1,664	56	1,720
6 産業	118	674	165	839
7 芸術	125	1,700	257	1,957
8 語学	397	1,075	501	1,576
9 文学	1,400	5,044	1,642	6,686
雑 誌	3,070	—	—	—
合 計	7,510	36,284	6,209	42,493

※上記の貸出冊数以外に、雑誌の一夜貸しが502冊あります。

浜松分館 (分類別貸出)

(冊数)

0 総記	219	4 自然	3,078	8 語学	15
1 哲学	9	5 工学	4,988	9 文学	89
2 歴史	29	6 産業	11	雑 誌	489
3 社会	44	7 芸術	28	合 計	8,999

(3) 文献複写統計

区 分	本 館			浜 松 分 館			
	人 数	件 数	枚 数	人 数	件 数	枚 数	
依 頼	学 生	513	557	4,156	}373	787	6,074
	教 官	1,553	1,829	24,043			
受 託	学 内	1,881	2,930	12,811	59	85	586
	学 外	698	889	6,443	295	448	3,290

外国への文献複写依頼 (本館)

相互貸借冊数

区 分	件 数	枚 (コマ) 数
学 生	1	19
教 官	168	3,575
合 計	169	3,594

区 分	本 館	浜松分館
貸 出	13	0
借 用	140	7

■増加図書統計

() 内は昭和58年度末の累計

	本 館			浜 松 分 館		
	和 漢 書	洋 書	計	和 漢 書	洋 書	計
0 総記	784 (30,833)	309 (8,183)	1,093 (39,016)	59 (3,291)	2 (794)	61 (4,085)
1 哲学	862 (20,159)	660 (12,253)	1,522 (32,412)	18 (2,913)	10 (520)	28 (3,433)
2 歴史	1,775 (37,731)	429 (6,950)	2,204 (44,681)	11 (1,593)	2 (214)	13 (1,807)
3 社会	5,856 (109,313)	3,039 (32,173)	8,895 (141,486)	30 (3,308)	0 (424)	30 (3,732)
4 自然	1,622 (51,790)	2,168 (43,275)	3,790 (95,065)	684 (21,374)	2 (25,050)	723 (46,424)
5 工学	1,008 (18,515)	222 (2,894)	1,230 (21,409)	813 (29,794)	378 (18,530)	1,191 (48,324)
6 産業	1,063 (31,033)	209 (6,046)	1,272 (37,079)	19 (609)	1 (23)	20 (632)
7 芸術	893 (15,763)	114 (2,525)	1,007 (18,288)	9 (1,686)	0 (272)	9 (1,958)
8 語学	617 (14,138)	606 (9,199)	1,223 (23,337)	18 (2,941)	15 (2,098)	33 (5,039)
9 文学	2,378 (44,888)	1,320 (28,967)	3,698 (73,855)	20 (3,600)	0 (822)	20 (4,422)
計	16,858 (374,163)	9,076 (152,465)	25,934 (526,628)	1,681 (71,109)	1,131 (48,747)	2,812 (119,856)